

英語の擬音語・擬態語について-日本語との比較-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸山, 孝男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12189

英語の擬音語・擬態語について

—日本語との比較—

丸 山 孝 男

1. はじめに

従来、英語の擬音語、擬態語というのは他の研究分野、たとえば音韻論、意味論、統語論あるいは英語史などと比較して言葉の周辺部あるいは特殊なものとして取り扱われてきたせいも、本格的に組織だった研究はなされてこなかった。それが論議の対象となった場合にも音声と意味のつながり、即ち、言語記号の恣意性 (arbitrariness) とか、言語起源論 (origin of language) との関連性においてであった。たとえば、F. P. ティニーンは『一般言語学』の中で、音声と伝達内容との必然的関連性を明確に否定して次のように述べている。

「意味されるものの音声を模倣する擬音語 (onomatopoeia)、たとえば buzz (ぶんぶん)、hum (ぶんぶん)、bang (ばたん) などはこの議論を無効にするものと見えるかもしれない。しかしこのような語は言語においては比較的少数しかなく、模倣の正確さそのものにしても当の言語で利用しうる音声に拘束されるのである⁽¹⁾」と。引用文中のこの議論というのはもちろん、それぞれ言語において用いられる音声と表現された伝達内容との間にはなんら必然的関連性がないということである。

言語記号の恣意性と並んで、擬音語が常に話題になってきたのは言語起源論との関連性である。たしかに擬音あるいは擬声は語形成、とくに語根の形成に

において強力に作用するので擬声説が言語起源の有力な一説をなしてきたこともうなずけないことはない。しかし、これには余りにも不自然な点と例外が多すぎる。かつて M. Müller は擬声に言語の起源を求める模倣説 (Imitation theory) をからかってワンワン説 (Bowwow theory) と名づけたとい⁽²⁾う。

アメリカの言語学者 Edward Sapir もある原始民族の言語には自然音の模倣が重要な要素をなしているけれども、言語とは、任意に造られた記号の体系であることを強調し言語の起源を自然界における音響の模倣に求めることをきっぱりと否定している。少し長くなるが、数ある否定説の中でも否定の根拠がかなり説得力をもっているのであえて引用したい。

What applies to the interjections applies with even greater force to the sound-imitative words. Such words as "whippoorwill," "to mew," "to caw" are in no sense natural sounds that man has instinctively or automatically reproduced. They are just as truly creations of the human mind, flights of the human fancy, as anything else in language. They do not directly grow out of nature, they are suggested by it and play with it. Hence the onomatopoetic theory of the origin of speech, the theory that would explain all speech as a gradual evolution from sounds of an imitative character, really brings us no nearer to the instinctive level than is language as we know it to-day. As to the theory itself, it is scarcely more credible than its interjectional counterpart. It is true that a number of words which we do not now feel to have a sound-imitative value can be shown to have once had a phonetic form that strongly suggests their origin as imitations of natural sounds. Such is the English word "to laugh." For all that, it is quite impossible to show, nor does it seem intrinsically reasonable to suppose, that more than a negligible proportion of the elements of speech or anything at all of its formal apparatus is derivable from an onomatopoetic source.

However much we may be disposed on general principles to assign a fundamental importance in the languages of primitive peoples to the imitation of natural sounds, the actual fact of the matter is that these languages show no particular preference for imitative words. Among the most primitive peoples of aboriginal America, the Athabaskan tribes of the Mackenzie River speak languages in which such words seem to be nearly or entirely absent, while they are used freely enough in languages as sophisticated as English and German. Such an instance shows how little the essential nature of speech is concerned with the mere imitation of things.⁽³⁾

考えてみれば、英語にしる、日本語にしる擬音語あるいは擬声語というのは所詮、鳥や動物の鳴き声、機械の摩擦音やその他の自然音をそれぞれの言語の音韻体系の中で可能なかぎり原音に近づけるよう努力した産物にすぎないものであって、最初から組織だった研究の対象になるなどということは無理なのかも知れない。ソシュールも『一般言語学講義』の中で、擬音語に言及しているが、擬音語が言語体系の組織的要素ではないこと、その数が少ないことなどから、擬音語には副次的な重要性しかないとしてあっさりとかたづけている。⁽⁴⁾

2. 英語の擬音語・擬態語

英語の擬音語の中で重要な構成要素をなしているのが、反復語である。従来、朝鮮語や日本語は英語と比較して、擬音語の宝庫と言われてきたのであるが、反復語に限って言えば、英語にも以外にバラエティーに富んだものがあることがわかった。ただ日本語のように無数にあるというのではなく、しかも音声と意味との間になんら必然的な関係がないものもある。Jespersen の分類方式に従い、英語の反復語の具体例をあげてみよう。⁽⁵⁾

- (1) 同一の音または音節がそのまま反復される場合：baa baa 「羊の鳴き

声) メエーメエー」, blub-blub 「(ヘリコプターのプロペラの音) バタバタ, バラバラ」, budda-budda 「(機関銃の発射音) ダッダッダッ, バッ バッ バッ バッ」, bubble-bubble 「あわ」, buck-buck 「めんどりの鳴き声」, chip-chip 「斧」, chirp-chirp 「(小鳥のさえずる声) チューチュー」, chug-chug 「エンジン」, chuff-chuff 「汽車」, clop-clop 「(馬のひずめの音) パカパカ ; (木ぐつなどの音) カタコト, カランコロン」, coo-coo 「(ハトの鳴き声) クークー」, drip-drip 「水」, fit-fit 「(ナイフを革砥でとぐときの音) シャッシャッ, シュッシュッ」, frou-frou 「(きぬずれの音) サラサラ」, hush-hush 「(《口》秘密の, 内密の)」, pom-pom 「自動高射砲, 対空速射砲」, snip-snip 「鋏」, tick-tick 「時計」, twit-twit 「(ひな鳥などの鳴き声) ピーピー, ピッピッ, チーチー」, who-who 「(フクロウの鳴き声) ホーホー」, whoit-whoit 「(カージナルの鳴き声) ホイット, ホイット」, zit-zit 「(鋭く切れ込みを入れる音) シャッシャッ, ザッザッ」。

上記の例から第一要素が全く同じ形で反復される場合、鳥や動物の鳴き声のほか、使用する器具や道具などによって出る音を表わす語が多いことがわかるであろう。

上記の例のほかに同一の音または音節がそのまま反復される場合が多いのは幼児語 (nursery language) である。主だった例をあげると、boo-boo 「すり傷, ちょっとしたけが」, choo-choo 「汽車ポッポ」, dada 「おとうちゃん, パパ」, din-din 「夕食」, doo-doo 「うんち」, boom-boom 「(《俗》うんち)」, gee-gee 「おんま, 馬」, mama 「ママ」, papa 「パパ」, ta-ta 「ばいばい」, poo-poo 「うんち ; うんちをする」, quack-quack 「アヒル」, wee-wee 「ちっち」, yum-yum 「うまうま」などがある。

英語であれ日本語であれ幼児語に擬音語重複形が多いのは、幼児の言語習得過程からして最も自然な形なのであろう。母親から与えられた言葉を全面的に模倣し、繰り返すことによって幼児はそれぞれの語彙を習得していくのであろう。因に幼児が多少とも積極的に言語学習を始めるようになるのは1歳半頃からであると言われている。

数は少ないけれどもオーストラリア英語の原住民からの借用語の中にいくつかの反復語が見られる。たとえば, bulln-bulln 「五色インコ」, wonga-wonga 「オーストラリア産のハト」, nulla-nulla 「こん棒」, willy-willy 「台風等の自然現象」, mia-mia 「森林地の粗末な小屋」など。

その他, アメリカの俗語表現やスコットランド語にもバラエティーに富んだ反復語の例が見られる。たとえば, dumb-dumb 「《米俗》とんま, のろま」, dust-dust 「《米俗》昇格したばかりの伍長」, doddle-doddle 「《スコットランド》左右に揺れる」, doo-doo 「《スコットランド》リード楽器」など。

(2) 第一要素の母音 [i] で第二要素の母音が [æ] になる場合: 主だった例をあげると chif-chaff 「うぐいす類の鳴き声」, click-clack 「かちかち」, chit-chat 「おしゃべり, むだ話」, cling-clang 「(踏切の鐘の音など) カンカン, ガンガン」, dingle-dangle 「ぶらぶら」, dilly-dally 「だらだら」, flim-flam 「でたらめ, ごまかし」, snip-snap 「ちよきんちよきん」, splish-splash 「(水がはねる音) バシャバシャ, バチャバチャ」, splitter-splatter 「(鉄板の上で油がはねる音など) パチパチ, ピチピチ」, wiggle-waggle 「よろよろ」, zig-zag 「ジグザグ」などがある。

擬音語の中で母音高化による例としては, この形がいちばん多いのであるが, Jespersen によれば, 第一要素は「軽い」もので「小さいもの」, 「近いもの」を表わし, 第二要素はその反対のものを表わすという。

上記の例のほかに英方言やスコットランド語にもこの形が散見される。たとえば, driggle-draggle 「不潔でだらしない女, じたらくな女」, dish-dash 「ハクセキレイ」, dibber-dabber 「暴動, 暴力ざた」などである。

(3) 第一要素の語頭の子音だけが変化する場合の主だった例は次の通りである。airy-fairy 「ふわふわ」, artsy-fartsy 「芸術家ぶった, 芸術かぶれの」, bow-wow 「ワンワン」, clatter-patter 「馬の足音」, dauby-sauby 「《英方言》へつらい, おだて」, dizzi-Lizzy 「《米俗》注意力が散漫な女」, dizzy-wizzy

「《米俗》丸薬」, drinky-winky 「《幼児語》飲み物」, ducky-wucky 「《米俗》美しい, きれいな, すばらしい」, fuddy-duddy 「《米俗》小うるさい人; 古くさい人」, fuzzy-wuzzy 「けば立った」, higgledy-piggledy 「ごたごたした, ごちゃごちゃした」, hocus-pocus 「奇術師などのまじない」, hoity-toity 「へつらった」, hotch-potch 「ごったまぜ」; hanky-panky 「ぺてん, ごまかし」, hubble-bubble 「ぶくぶく, ごぼごぼ」, hugger-mugger 「こそこそ」, mack-lack 「《スコットランド》ガタガタ, ガチャガチャ」, meckle-keckle 「《英方言》(繊維などの質が)わるい」, mishmash 「寄せ集め, ごたまぜ」, nasty-pasty 「賛成できない」, nasty-wasty 「《米俗》ひどく不潔な, よごれた」, pow-wow 「《米俗》会議, 集り」, roly-poly 「ずんぐりむっくりの; ジャム入りのケーキのこと」, tosy-mosy 「ほろよいの」, tuzzy-muzzy 「ぼろぼろの」, teeny-weeny 「とても小さい, ちっちゃい」, walki-talkie 「携帯用無線電話機」, willy-nilly 「いやがおうとも」, wing-ding 「《米俗》かっとなること, 激怒」など。

この形の例は(1)の例に続いて多いのであるが, とくに米俗語表現の中に顕著に見受けられる。これは俗語表現の特徴からして意味の強調と大いに関係があるであろう。Jespersen によれば, 押韻結合を形成する反復語の場合, 第二要素がおもしろおかしいつけたし (playful appendix) の感じを与えると言うのであるが, 英語を母国語としない者にとっては, そのおかしさが実感として伝わる場合と, なんら伝わらない場合がある。

上記(1), (2), (3)のカテゴリーに当てはまらないもの, つまり, 第一要素の母音 [i] が第二要素で [ɔ] に変化する場合があるが, その数は少ない。たとえば, bing bong 「(呼び鈴などの音) ピンポーン, ビンポーン, キンコーン」, ding dong 「(鐘を打ったときの音) キンコーン, カンコーン, カーンカーン, ピンポーン」, flip-flop 「パタパタ, バタバタ, バタンバタン, ペタペタ」などである。

3. 日本語の擬音語・擬態語

英語と比較すると日本語は確かに擬音語、擬態語のオンパレードである。ちよっと思っただけでも、「いらいら」、「うかうか」、「うはうは」、「おたおた」、「がくがく」、「からから」、「ぎざぎざ」、「きよろきよろ」、「すくすく」、「だらだら」、最近にいたっては「ルンルン」、「ちゃっぷいちゃっぷい」などいくらでも思いつく。また日本ではすでに本格的な「擬音語・擬態語辞典」が数種類出版されているということは、日本語には英語、恐らくは他のいかなる言語にも比較して、擬音語、擬態語がいかに多いかの何よりの証拠であろう。それでは日本語は他の言語と比較してなぜ擬音語や擬態語が多いのであろうか。

先ず第一に考えられるのは日本人の自然の風物に対する受けとめ方の問題である。日本語で書かれた風物に関する随筆を読むと、「カッコウの鳴き声に心地よく目覚める」とか、「夏の風物詩として欠かせないセミの鳴き声が聞かれずさびしい」とかという文章がいたるところにでてくる。秋になると手紙の書き出しでも「ひぐらしの声に、漸く秋の訪れを覚えるこの頃……」というのが多い。そう言えば芭蕉にも「閑さや岩にしみ入蟬の声」というのがあった。もちろん、日本人だけが、自然を愛するわけではないが、日本人独特の自然愛、特に虫や小鳥の鳴き声に感謝し、じっと耳を傾ける気持ちが多種多様の擬音語や擬態語を生み出すことになるのである。秋の夜長、くさむらにすだく虫の音にただひたすら聞き入るのも日本古来の優雅な趣味だ。たとえば、蟬の「ミンミン」、鈴虫の「リンリン」、松虫の「チンチロリン」など。これに対応する英語の擬音語は非常に少ないし、まったくない場合もある。

P. ミルワード氏は『イギリス風物誌』の中で「日本はと見ると、イギリスにいる鳥のほとんどは日本でも見られるのだが（コマドリとナイチンゲールは例外である）、夏の間は虫の音に邪魔されてその声を楽しむどころではない。特に耳をつんざくセミ（cicada）の音には小鳥達も閉口して、ノイローゼになってしまうか逃げ出してしまいたくなるのではなからうか。イギリスにはセミが全く生息せず、ミツバチの羽音が花の間に微かに響いているのと草原でバツ(6)タがおとなしく鳴いている他は夏を騒がせる虫がいけないのは有難い。」と述べ

ているが、虫の音に耳を傾けるイギリス人と日本人の心情の違いを見事に示している例と言えよう。

さて、日本語には擬音語に続き擬態語もかなり多いのであるが、とくに人の態度やしぐさを描写する擬態語が多いのが大きな特徴である。これは日本独特のタテ型の社会構造、対人関係、他者に対する過剰な意識と大いに関係があるだろう。日本に滞在している外国人に対して日本人が一番よく質問するのは「日本あるいは日本人のことをどう思うか」ということだそうである。自分はまわりの人からどのような目で見られているかということに日本人はとくに注意を払う。このことが多種多様の擬態語を生み出すことになる。

ここで少し視点を変えて言語の構造の面から見ると日本語が擬音語や擬態語を生みだしやすいようになっているのも事実である。たとえば語根に「い」、「ん」、「っ」、「と」などを付け加えれば無数にできあがる。このようなことは恐らく、日本語以外に不可能なことであろう。

最後に人間の脳の働らきを研究している角田忠信氏は医学的実験の結果から、日本語に擬音語（擬声語）、擬態語の多い理田を次のように説明している。「このように、波の音にも言語脳で応じている日本人は環境音の多くに意味を持たせ、一定のカテゴリーに当てはめてしまう。このことが擬声語・擬態語の豊富な理田になるが、さらに多くの情報刺激によって平常な脳のメカニズムを乱され易いという特徴が日本人の知的な働きにどのように影響するのであろうか。」⁽⁷⁾と。日本人と西欧人の脳における音の処理の仕方を実験して、比較検討したのであるが、何ともユニークな発想である。

4. 英語と日本語の擬音語・擬態語の使用状況

英語の擬音語や擬態語は日本語のそれと比較してその数が非常に少ないことはすでに述べた。これがそのまま使用状況にも反映している。英語でも伝承童謡や漫画などでは擬音語が頻繁に使われるのであるが、普通の散文では非常に少ない。英語には羊、犬、にわとりの鳴き声を表わす擬音語としてそれぞれ baa, bow-wow, cock-a-doodle-doo があるが、実際には bleast, bark, crow

などの動詞が使われるであろう。とくに英語の動詞の場合、日本語で言うところの擬音語や擬態語の意味や感じがすでに含まれている場合が多い。波が「ばしゃばしゃと打ち寄せる」は lap でいいし、戸を「ばたんと閉める」は slam で表わすことができる。肩を「ぼんとたたく」は pat でよい。こういう例は無数にあるが、「歩く」を例にとってみよう。

日本語	英語
ちょこちょこ歩く	waddle
てくてく歩く	trudge
とことこ歩く	trot
とぼとぼ歩く	plod
ぶらぶら歩く	stroll, pad
よちよち歩く	toddle
どしどし歩く	tramp

日本語では「動詞＋副詞」になるところを英語では一語ですむのである。このことがまた英語の擬音語や擬態語の使用範囲を著しく狭くしているのである。ただ面白いのは英語は日本語と比較して家畜の鳴き声が擬音語として豊富にあるということである。たとえば、馬の鳴き声を表わす言葉として英語には、neigh, snicker, sniff, snort, spit, squawk, whinny, whiii, whicker といろいろあるが、日本語では「ヒヒーン」だけであろうか。この他に羊の場合には baa, blat, bleat, bleet など、豚の場合には grunt, hoink, hoogh, oink, squeak など、鳴き声を表わす語が英語には豊富にある。これは英語を使う民族がかつては牧畜民族であったことを示すものであろう。

また、これは擬音語ではないけれども、牛に関する表現にも英語と日本語とで違いがあって面白い。たとえば、英語の steer は「去勢された雄の小牛」の意味であり、heifer は「子を産まない雌の小牛」の意味である。英語では一語ですむところを日本語では数語を用いて表わさなくてはならない。このことも、日本民族と比較して英語を使う民族がいかに古くから家畜生活を営んでき

たかを示す有力な証拠になるであろう。

5. む す び

近頃、日本でも英語の擬音語や擬態語に対する関心が急速に高まってきているようである。ブームとまでは言わないがその証拠にここ数年の間に「擬音語・擬態語辞典」が続々と刊行されている。たとえば、『日英対照：擬声語辞典』（学書房出版，1981），『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』（金星堂，1984），『日英擬音・擬態語活用辞典』（北星堂書店，1984），『英語擬音語辞典』（研究社，1985）などである。

これは今だに続いている漫画ブームと関係があるかも知れない。何と云っても英語であれ、日本語であれ漫画こそが、擬音語や擬態語の宝庫なのであるから。事実、日本の漫画の英訳本がたくさん出版されている。テレビの音声多重放送を中心にして音声としての英語が日常生活に深くかかわってきている点も見逃すことはできない。生き物としての話し言葉に関心が向いてきているのであろう。

さて、英語の擬音語や擬態語というのは他の研究分野と比較して周辺部として考えられてきたために本格的な研究がなされてこなかったことについてはすでに述べた。しかしここで少し視点を変えて英語の擬音語や擬態語を日本語のそれと比較してみるとかなり興味深い側面が浮かびあがってくるのである。英語と日本語の擬音語・擬態語の違いの背後にはそれぞれの国の社会構造の違い、対人関係、自然の風物に対する受けとめ方の違いが相かからんでいることがわかってくるのである。

〔付記〕 現在、私は英語の「擬音語・擬態語辞典」を編集執筆中なのであるが、この小論はいわば編集途上のノートといったものである。辞典が完成したあかつきには、とくに文化的な側面から、日英の擬音語、擬態語を比較検討したいと思っている。(September 7, 1985)

注

- (1) F. P. ディニーン, 『一般言語学』, 三宅鴻, 山中桂一, 秋元実治訳, 大修館書店, p. 12.
- (2) 『現代英語学辞典』, 成美堂, p. 614.
- (3) Edward Sapir, *Language* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1949), pp. 7~8.
- (4) フェルディナン・ド・ソシュール, 『一般言語学構義』, 小林英夫訳, 岩波書店, pp. 99~100.
- (5) Otto Jespersen, *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Vol. 6, ss 10. 2-4.
- (6) P. ミルワード, 『イギリス風物誌』, 舟川一彦訳, 大修館, p. 53.
- (7) 角田忠信, 『日本人の脳』, 大修館, pp. 358~9.

参 考 文 献

- 『現代英語学辞典』(成美堂, 昭和48年)
『新英語学辞典』(研究社, 1982)
国廣哲彌編『日英語比較講座』第4巻(大修館, 1982)
三戸雄一, 笥寿雄他編『日英対照: 擬声語辞典』(学書房, 昭和56年)
尾野秀一編著『日英擬音・擬態語活用辞典』(北星堂書店, 昭和59年)
藤田孝, 秋保慎一編『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』(金星堂, 昭和59年)
松田徳一郎監修『英語擬音語辞典』(研究社, 1985)
浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』(角川書店, 昭和53年)
天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』(東京堂出版, 1974)
L. Bloomfield (1933), *Language*, Holt, Rinehart and Winston
Transactions of the Philological Society (1865), *Dictionary of Reduplicated Words*